

地形・集落の歴史的基盤条件との関係に着目した 近代住宅地の景観特性の持続に関する考察 —神戸市住吉・御影地域を対象として—

A Study on the Sustainability of Landscape Property in Modern Residential Areas
Focusing on Relation to Topography and Historical Basis of Settlement
- A Case Study of Sumiyoshi and Mikage Area, Kobe City -

○金隼泳*1, 山崎寿一*2, 山口秀文*3, 陳鉞*4

KIM Joon-Young, YAMAZAKI Juichi, YAMAGUCHI Hidefumi, CHEN Cheng

In the Sumiyoshi and Mikage areas of Kobe City, which have developed as good suburban residential areas, we will examine how the spatial structure of pre-modern rural villages has been inherited in modern residential areas. The overlaying of topographic maps revealed that natural landforms, historical resources, and the spatial structure formed by them have been preserved to the present day. Furthermore, based on the pre-modern nature and industry, the post-modern residential development brought about the regional landscape with granite, and the principle that the landscape property have been sustained despite being exposed to various destructive factors was found.

キーワード：地形, 集落, 歴史的な脈, 住宅地形成, 景観変容

Keywords: Topography, Village, Historical Context, Residential Area Development, Landscape Transformation

1. 研究の背景と目的

神戸市住吉・御影地域は、近代に開発された阪神間郊外住宅地の先駆けとして知られる。朝日新聞社の創業者である村山龍平氏が邸宅を構えたことに端を発し、大阪の有力事業家たちが数多くの邸宅を構えたほか、阿部元太郎氏による村有地での宅地経営や資産家による積極的な住宅地経営への参与は、当地域の住宅地形成における大きな特徴である。

一方で住吉・御影地域は、農業と酒造や採石といった地場産業のもとに成り立つ近世の在郷町、農村集落が現在の環境の歴史的基盤となっている。酒造業の嘉納家や、山田の大地主であった植田家は、近代以降も地域の重鎮として深くかかわり、近代以降の御影町や住吉村の運営にも大きく関与した。

日本に田園都市の思想が紹介され、大都市郊外でのベッタウン開発が本格化する以前から郊外住宅地としての開発が始まった当地域では、農村集落や地場産業などの地域性をより強く反映した環境形成が為されてきたと

考えられている。1970年代には、阪神間の住民でもあった都市計画家の水谷顕介・太田尊靖らが「都市住宅」誌において「田園都市—阪神間—」¹⁾を発表し、また坂本勝比古らの近代建築史の研究グループが「阪神間の住宅地形成に関する基礎的研究」²⁾をまとめたことが端緒となり、住吉・御影地域における近代の郊外住宅地としての発展についてこれまで多くの研究がなされてきた。景観の観点からは、当地をその代表的な産出地とする御影石による石垣や擁壁が住宅地造成において多用されたことで、今にも残る地域的景観が形成されたことが、三宅正弘により指摘されている³⁾⁴⁾。更に近年では、松井智美による旧集落の空間構成と在来地主の土地所有に関する研究⁵⁾や、森井夏樹による住吉村における近代以降の土地経営、土地区画に着目した研究⁶⁾、また、瀬戸口由佳による御影石の地域的景観の維持・変容に関する研究⁷⁾が蓄積されており、本研究はそれらを基礎に以下の目的をもってなされたものである。

本稿では、住吉・御影地域が地域の風土的、歴史的な

*1 神戸大学工学部建築学科、学部生

*2 神戸大学大学院工学研究科教授、博士（工学）

*3 神戸大学大学院工学研究科助教、博士（工学）

*4 神戸大学大学院工学研究科博士課程

Undergraduate Student, Faculty of Eng., Kobe Univ.

Professor, Graduate School of Eng., Kobe Univ., Dr. Eng.

Assistant Professor, Graduate School of Eng., Kobe Univ., Dr. Eng.

Graduate Student, Graduate School of Eng., Kobe Univ.

脈を基に良質な住宅地を形成したことに着目し、近世以前の農村集落の空間構造から、のちの住宅地開発に伴う景観形成に対するその影響を明らかにする。また現在にも受け継がれる近世以前の空間構成を抽出することで、郊外住宅地における地域らしい景観の持続原理と、保全に関する課題および展望を示すことを目的とする。

2. 研究の方法と対象地域

まず、地形図や地形分類図を用いて住吉・御影地域の地理的条件を求め、邸宅が立地し始める以前の地相を詳細に記した明治18年及び19年測量の仮製二万分一地形図や住吉村誌⁸⁾や御影町誌⁹⁾などの文献から近世以前の農村集落の空間構造を示す。続いて村山に始まる資産家らによる邸宅の集積と、阿部に始まる住宅地分譲開発の変遷をたどりつつ、時代間での地図の比較分析と既往研究の成果を基に近世以前の構造がいかにして保存されてきたのかを示す。このとき、

- (1) 「地形や街路網といった基盤条件」
- (2) 「住戸やマンションといった建築物」
- (3) 「御影石擁壁に代表されるような景観要素」

の三段階に分類して変化のメカニズムを整理する。最後に、現代の空間構造とそれに基づく景観から、農村時代の空間構成がいかにして保存され、あるいは変化してきたかについて考察する。

対象地域は JR 東海道本線以北で図1に示す範囲とする。この地域は、神戸市合併前の旧住吉村と旧御影町に渡り、旧住吉村では山田区、空区、観音林区、旧御影町では郡家におおよそ相当する地区である。在郷町や街道の宿場町があった住吉と御影の本村は含まず、山手の農業を主体とした集落が立地していた地区である。

3. 住吉・御影の立体的空間構成

3-1. 農村集落としての住吉・御影

図2で示したように、当地域は、概ね六甲最高峰の付近を源流とする住吉川の扇状地上に位置し、南向きの緩やかな傾斜地となっている。ただし、最上部の山麓は段丘上となり、住吉川の川床よりも高い位置にある。しかし、それより下流の住吉川の両岸は天井川であり、周囲の扇状地より標高が高い。JR 線や西国街道の付近以南では扇状地性低地となり、そのまま大阪湾へと落ち込む。標高としては、最北端の白鶴美術館付近ではおよそ100m、最南端のJR住吉駅付近ではおよそ24mである。両地点は直線にして1.25kmほどであり、傾斜の大きい

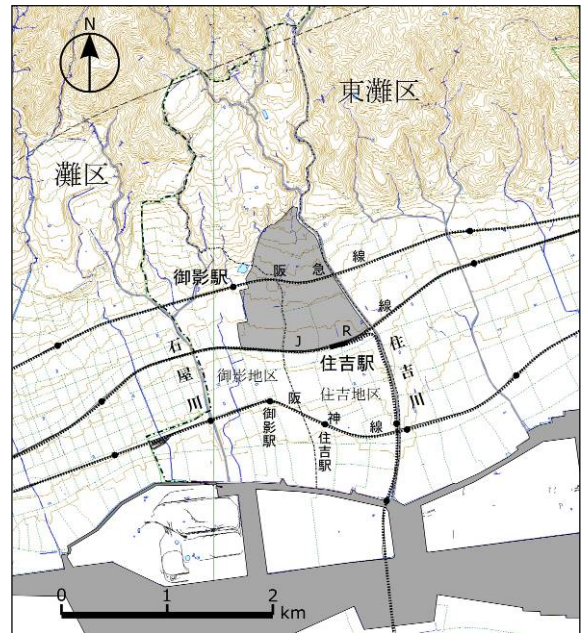


図1: 対象地域とその周辺 (基盤地図情報を基に作成)

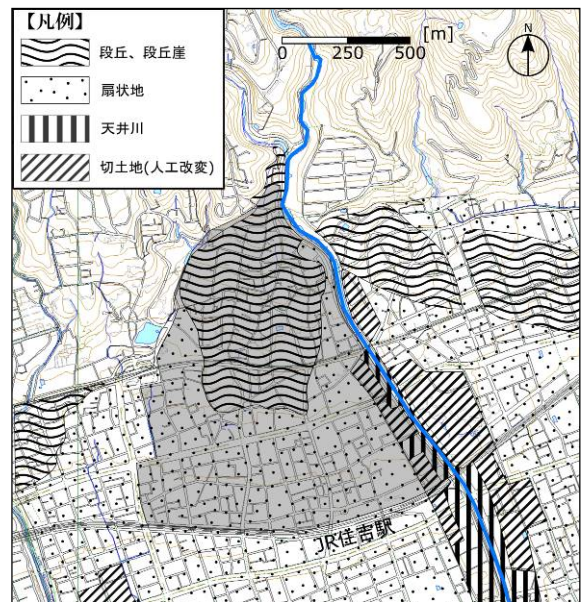


図2: 現在の地形分類図

※国土地理院発行「数値地図 25000 (土地条件)」を基に作成。

地区であることが分かる。後背部は、北西に鴨子ヶ原と呼ばれた台地があるほか、急斜面で複雑に入り組んだ地形の赤塚山が北に位置する。

次に、図3で住宅地開発が始まる前の地勢を示した旧陸軍による仮製二万分一地形図を分析する。これは、1885年(明治18年)とその翌年の測量地図であり、農村集落の構造をよく示している。これによると、1874年(明治7年)に開業した国鉄住吉駅(現 JR 住吉駅)の南に西国街道があり、そこから分岐する有馬道に沿って本住吉神社の上手にある空之町や山田の集落が形成され



図3: 農村としての集落の空間構成
※仮製二万分の一地形図(1885/1886年)を基に作成。

ていることが分かる。また御影の市街地から山田方面へ向かう道には、弓弦羽神社を北に据えた郡家の集落が立地する。1889年(明治22年)の町村制施行により御影町に属したが、測量当時はまだ独立した郡家村である。

また、土地利用では、住吉川沿いは松林、山田集落の東西には田畑、その南の段丘崖では雑木林と墓地が位置し、空之町や郡家の周囲には田が存在している。また郡家の北斜面は弓弦羽神社の森と松林がある。つまり、洪水による砂礫等で荒廃する川岸、および急傾斜の段丘崖が農業に適さないために植生が残され、街道沿いの居住域と社寺林を除いて、残る緩斜面が田畑として耕されるという構成を示している。

住吉川は、山田の上端において2本の分流が導かれ、住吉、御影等の各地域で利用されていた。うち一本は山田や郡家、御影を潤し、もう一本はその他の住吉村内を潤していた。住吉川の水量は極めて豊富かつ急流であることから、水車産業が盛んであった。上流の西谷、東谷や各分水沿いには数多くの水車が設けられていた。

花崗岩質の六甲山地で採れる御影石の採石産業や急流による水車産業は、まさに当地の自然条件に基づくものである。酒造業においては、当地の自然条件が非常によい環境をもたらしたことや、港の存在と水運による大消費地の近さといった経済的立地も重要である。水車産業も酒造のための精米を目的としますます栄えるように

なった。このように、自然地形を基盤に発展した産業は、地域の空間構造やそれに基づく景観にも大きな影響を及ぼしていると言える。

なお、図3の地形図の測量ののち、1889年(明治22年)の町村制施行後に村道の整備がいくつか行われている。例えば千歳道は、有馬道沿いの現在の山田区民会館付近から西に分岐し、直線的に浜手へ向かう南北の道である。村道第一号として整備されたが、この時に田畑を分断するように道路が建設されている。^{注1)}

3-2. 近代以降の住宅地開発に伴う空間変化

当地域が郊外住宅地として開発されるきっかけとなったのは、鉄道線の開通と住吉駅の設置である。^{注2)} これにより大都市大阪からの時間距離が大幅に短縮され、都市の環境悪化を嫌った資産家らの注目を集めるようになった。

(1): 地形・街路網等の基盤条件

1907年(明治40年)以前には阿部元太郎によって天井川である観音林や反高林での土地開発と住宅地分譲が始まった。^{注3)} その後、未利用であった山林等の荒地に加え既存民家周辺の田畑でも分譲地開発が進むが、この地域では耕地整理がなされないまま宅地化が進み、集落内の街路網や田畑の畦道などがそのまま街路として残されていることも多い。1932年(昭和7年)の地形図から、1889年の地形図と比較して位置を変えていない道、残存する田畑や山林等を抽出し、図4に示した。これによると、近世以前の街路と地形を基盤に、先述した千歳

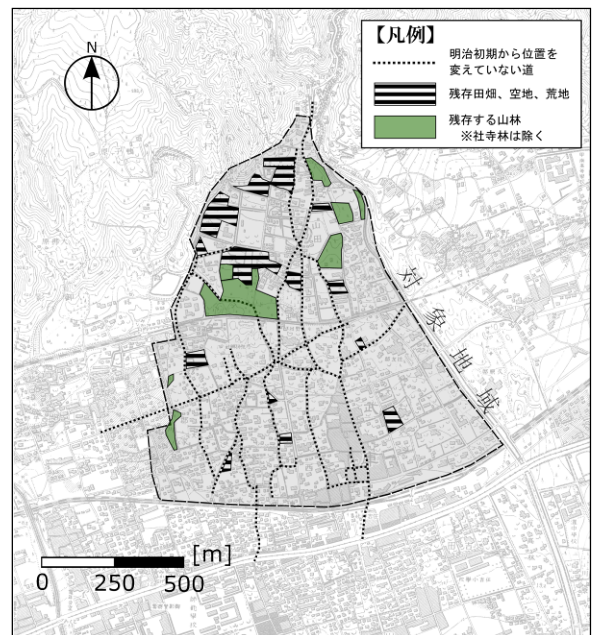


図4: 昭和初期に残る農村集落の空間構成要素
※一万分の一地形図(1932年)を基に作成。

道や神戸水道道等の新たな道路がいくつか確認され、広大な面積の区画と其中的の大きな邸宅がいくつも見られる。田畑や山林は特に鉄道に近い南方ほど少なくなっているが、大規模な地形改変もなく、新しい街路は扇形に広がる地形に沿って緩やかな曲線を描き、墓地や寺社等の旧集落の共同空間も失われていない。

(2) : 住戸・マンション等の建築物

1900年(明治33年)頃には村山龍平が郡家に土地を購入し、邸宅を構えたのを皮切りに、1904年(明治37年)には住友家の重鎮、田辺貞吉が住吉村の反高林に土地を購入している。これはのちに住吉本家に譲られ、長らく住友本邸として使われていた。当地が資産家らに好まれた理由としては、交通の便がよく、都市公害から無縁であり、六甲山麓の当地の環境が住まうのに良いと評価されていたことが挙げられる。^{注4)}そしてこれらの邸宅の広大な敷地の大部分は、屋敷林であることが1932年の地形図に示されている。民家の密集する近世からの街道沿い集落を、田畑や山林に代わって豊かな緑を残す広大な邸宅敷地が取り囲む構造は、未だ十分に伝統的な集落の空間構成を残していると言えるだろう。

(3) : 御影石擁壁に代表される景観要素

これらの住宅地の造成には、地域で産出される御影石が多用された。特に農業的利用価値の少なかった観音林などの松林は風化花崗岩質の砂礫土壌が主であり、宅地造成に際して多くの石材が出土した。^{注5)}これらをそのまま外構の石塀に利用するなどして、御影石の野面積みによる地域的景観が形成されることになった。扇状地や段丘といった斜面地上の曲線的な街路沿いに、傾斜に合わせた自然石による立派な石垣擁壁が連なる景観は、この地域の近世以前の自然地形、更には採石という地場産業の存在を色濃く反映したがゆえの地域的景観であるこ

とが分かる。このような地域的景観をよく表した当時の写真を図5に例示した。いずれも御影石の野面積みによる立派な擁壁や石垣があり、その上にはあふれるほどの屋敷林の緑がある様子が見て取れる。

また、このような良好な住宅地の形成には在来旧家の存在も欠かせない。新しく移り住んだ資本家らとともに、酒造の嘉納家を筆頭に村の運営に深く関与し、学校や協同組合の設立に参画した。良好な居住環境が住民の主導によって整えられたのである。大都市からの移住者に刺激を受け、それを行動に移すだけの経済力を持たせるに十分なほど強固な地場産業が当地にはあったことが重要だと捉えられる。さらに阿部氏による観音林の開発等、山林における宅地開発では、住吉村の村有地は売却せずに宅地開発が進められた。^{注6)}これもまた、分筆による住戸の密集化や用途転用が発生しにくくなった点で後世への景観維持に重要な要素となっていると言える。

以上の分析から、郊外住宅地の開発前後の空間構造をモデル図として表したものが図6である。近代以降、郊外住宅地としての開発が進んだものの、近世以前の農村集落の構成が概ね保存されたこと背景に、自然地形や地場産業が存在したことを示している。

3-3. 邸宅解体や区画整理等による住宅地の変容

(1) : 地形・街路網等の基盤条件

戦後になると、太平洋戦争での空襲からの復興や、それに関連した土地区画整理事業が実施された。合わせて相続も大きな原因となって、広い区画を持つ敷地も徐々に細分化される傾向が強くなる。^{注7)}さらに、昭和後期には山手幹線の整備と道路の拡幅が行われ、自然地形に基づかない直線的な道路が建設された。また、近年になって鴨子ヶ原の末端部、山田と接する急斜面地にも開発が及んでいる。^{注8)}



図5・住吉・御影の近代住宅地が作り出した地域的景観

左：1969年頃の村山邸付近（御影郡家）／中：1958年頃の武田邸付近（住吉山田）／右：住吉観音林の街路景観。

※左および中の写真は参考文献7)より引用。いずれも住吉歴史資料館の提供。右の写真は参考文献1)より引用。

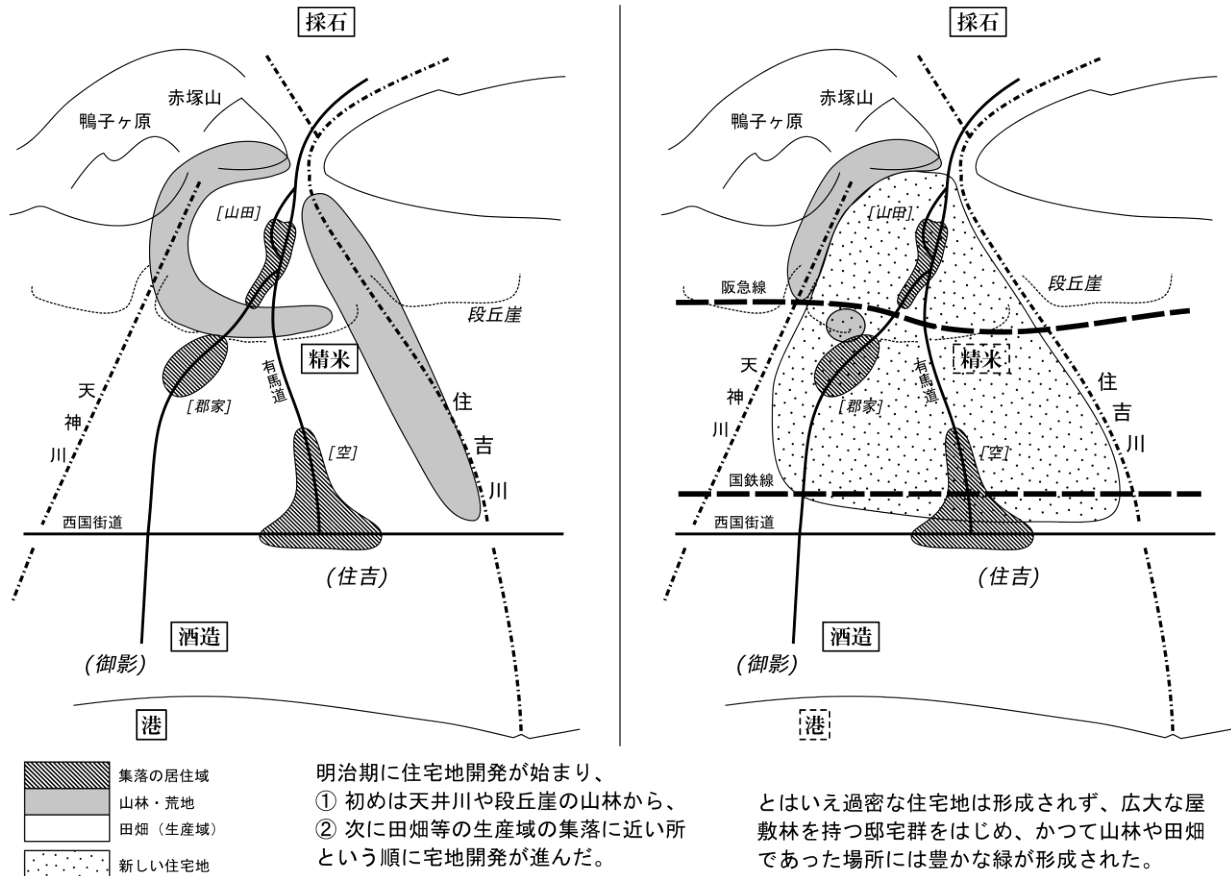


図 6: 近世以前(左)と近代(右)を比較する空間構造のモデル図

(2) : 住戸・マンション等の建築物

前述の戦災や区画整理や相続のために、戦後になると邸宅は解体される数が多くなる。また、山手幹線の開通を筆頭に道路整備による立ち退きは邸宅の解体に一層拍車をかけることになった。邸宅の解体により生じた敷地は、その広さゆえに大規模なマンションが新たに建設されたり、細分化されて戸建住宅が立ち並ぶようになる。旧集落域に密集する戸建住宅群と、周囲の広大な敷地を持つ邸宅群という領域性は徐々に失われるようになり、敷地の狭い戸建住宅が平面的に広がる中、随所に中層の集合住宅が建つ住宅地へ転換しつつあることが分かる。

(3) : 御影石擁壁に代表される景観要素

1938年(昭和13年)には阪神大水害が発生し、当地域の邸宅群にも甚大な被害が及んだが、流れ着いた石は擁壁などの修復に再利用され、地域的景観の形成要因となった。^{注9)} その後も昭和30年頃までは地場石材を利用した宅地開発が見られたが、区画整理等による新たな住宅地の造成では、六甲山での採石産業が途絶えたことや採算性の都合などから地産の御影石が使われることはほとんどなくなり^{注10)}、自然石の石垣による統一的地域

らしい景観が攪乱されるようになった。

また、邸宅の解体による区画の細分化は、敷地内から緑が失われることにつながり、外構の御影石による石垣もまた壊されるケースが多数発生するようになった。これらは、地域らしい街路景観に直接的な影響を与えてしまう。当地域では1980年代から1990年代にかけて最もマンション建設が盛んであったが、その際の石材利用率は低く^{注11)}、同時に多くの邸宅が解体されていることから、急速に景観が破壊されたのもこの時期であったと推定できる。また、先述の山裾の急斜面地の開発も、集落と生産域を取り囲むはずの緑が失われたことから、中高層のマンションの出現と合わせて、街路からの遠景に影響を与えていることが考えられる。

しかし、2000年代以降は再び石材の利用傾向が高まり、外構に御影石の石垣が残っていた敷地の再開発でもそれがそのまま保存されたり、一度解体された場所でも再び御影石の擁壁や石垣が構築されたりする事例が増加している。更には、地域の景観に対する配慮から過去に御影石の石垣がなかった場所においても外構に石垣が造られる例も生じている。^{注12)}



図7: 現代に受け継がれる近世・近代の景観

4. 農村集落がもたらす現代の景観

図7では、近世から近代以降の開発を通して現代にまで受け継がれている景観要素を表した。

住吉・御影地域では、近代の住宅地開発が、近世以前の農村において共有林や川沿いの荒地といった未利用地から進み、徐々に都市化の進行と産業構造の転換に伴って田畑が住宅地へと開発されていった。この時、広範囲にわたる同時の開発がなかったために、一括的な街路網の整備や大規模な地形改変がなされなかった。これは、図2で示した地形分類図にもよく現れている。鴨子ヶ原や赤塚山などの戦後の開発による造成地とは違い、当地域は天井川のごく一部を除いて切土地や盛土地が存在していない。段丘や天井川、扇状地といった自然地形、そしてかつての水田の畦道等がそのまま生かされた。墓地や神社といった宗教儀礼に関する共同空間も、明治初期から変わらない位置に立地している。農村の立体的空間構成が、山林と生産域が緑豊かな住宅地に変化するあたりで概ねそのまま保存されていると言える。

当地域は標高差が大きく、北側から段丘、段丘崖、扇状地または天井川という構成で多様な斜度の地形をなしている。特に斜度の大きい山田では立派な擁壁が発達し、細く緩やかな曲線を描きながら上下する道とその両脇に迫る御影石の石垣、その上から張り出す木々の緑という景観が典型をなしている。

一方、昔の有馬道沿いの旧集落においては、空地区では商店街が形成されているが、北部の山田地区でも邸宅群の細道とは異なった景観を持っている。旧家から継承していることの多い戸建住宅が連なり^{注13)}、一部では暗渠化されていない水路が残され、復元された水車が置かれている。御影石の立派な擁壁の側にもここでは地蔵尊が安置され、ここが集落の中心軸たる街道であったことを示している。

南部の郡家や空地区についても、過去の邸宅の擁壁が残されたまま再開発されるケースから御影石による景観を継承しようという潮流がみられる^{注14)}が、戦災による土地区画整理事業や山手幹線の開通の影響が極めて大き

く、農村の空間構造はかなり失われていると言える。特に郡家では、かつての集落の居住域を分断するように山手幹線が整備された。JR 住吉駅の近傍では概して区画も小さく、戸建住宅や中層マンションが一様に建ち並ぶため、商店街のあるかつての街道沿いに民家が連なっていたという構成は見えにくくなっている。

すなわち住吉駅周辺や山手幹線の沿道は、国土軸という広域的流動に伴う開発の影響を強く受けたために農村集落の構造が失われていると考えられる一方で、有馬道の広域的重要性が失われ、国土の東西軸から外れた山手では今もよく残っているという対照性が際立っている。

5. まとめ

住吉・御影地域における景観の形成・破壊・持続のメカニズムを図に表したのが図8である。自然を基盤に近世までに形成された農村集落の景観が、住宅地開発とともにどのような変遷を辿ってきたのかを示している。

当地域では、田園都市思想に基づく大規模な郊外住宅地の開発が始まる前に、全国的にも先駆けて住宅地が形成され始めた。つまり、自然的土地利用が段階的に宅地化されていったのである。そのため、近世以前の農村構造が比較的によく保存されている。特に山手では今もその影響が大きく、街道沿いの旧集落内には歴史的な景観要素が、周囲の森林や田畑であった領域には邸宅地の豊かな緑が、それぞれよく残されている。

しかし、地域は常に災害の危険性や開発圧力に晒されており、すでに歴史的空間構成、およびそれによる景観も消失した場所が多いことも分かった。また、山手の山田地区においても、中層マンションが数多く建ち並び、景観の阻害要因となっているケースが見られる。そうした状況下で、特にマンションの建設において外構に御影石の石垣を残す、あるいは再現・新築する例が増加傾向にあり、地域的景観への意識が高まりを見せているのは景観保全にとっては好影響である。斜面地、天井川といった自然地形やそれに基づく御影石の採石という地場産業、そして早くから近代住宅地としての開発が始まったことによる段階的な宅地開発が、必然的に地域的景観を創出したのに対して、現在ではそれが景観特性となって地域のアイデンティティとして継承されようとしている。また、開発等の破壊要因がある一方で、農村の空間構造を基にした良好な住環境で醸成されてきた景観への意識が、景観保全に介入している可能性がある。

6. 今後の課題と展望

今後の課題としては、景観特性から生じた地域的景観への意識と、その作用について研究の余地がある。景観の保全には環境形成に積極的な住民の存在が欠かせないと考えられる。当地域は、酒造をはじめとする地場産業に従事した有力な在来旧家と、都市部から流入した富裕層という特徴的な住民らが住宅地としての環境を整えた歴史がある。自然地形と産業に加えて住民の第三要素が、近代に住宅地として発展する過程で歴史的、風土的文脈を破壊することなく地域らしい景観を形成するのに大きな役割を果たしたのか、また良好な住環境において、住民の間でいかにして住環境や景観に対する意識が生じるのかを明らかにする必要がある。

今後は、地域が受け継いできた自然に従う空間構成をより強固にし、ひとつひとつの景観が連続して調和をなすような計画が必要なのではないかと考える。山手幹線のように地域の文脈を無視し分断するような開発、また立体的にも、傾斜地の遠景を阻害するような中高層の建築物を建てることは、地域の一体性、更には景観的連続性を著しく損なうものである。一方で、住吉川の水害や土砂崩れなどの斜面地災害の危険性という当地域において無視できない課題もある。災害対策と連携しながら、景観資源を破壊する開発を規制し、今も残される信仰空間等の共同空間、街道沿いの史跡、周囲の住宅地の豊かな緑という空間構造、御影石の擁壁が代表するような地域的景観を保全することが肝要となるだろう。

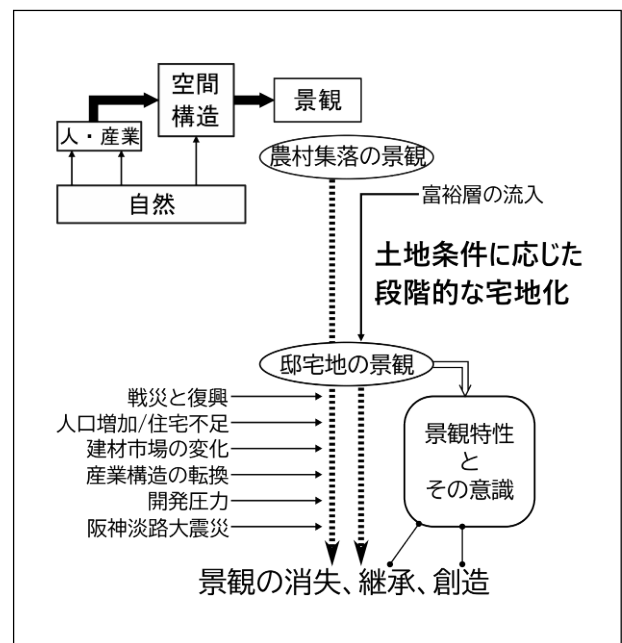


図8: 景観形成・破壊・持続のメカニズム

【注釈】

注1) 参考文献 8) pp.603 を参照。

注2) 参考文献 8) pp.585 には、「本村の発展は日露戦役後のことに属するが、その遠因の一は驛設置にありと云へる。殊に観音林・反高林の開発は鐵道敷設と重大なる関係がある。」との記述がある。

注3) 参考文献 6) では、観音林の一地区において、阿部氏の宅地開発によって 1907 年以降で地番が細分化されていることが言及されている。また、参考文献 8) pp.16 には、「阿部元太郎氏が、明治三十八年本村の観音林や反高林方面が住宅地として将来ある事に着目して、此をば村から坪七厘で借受けて経営に着手…」と記されている。

注4) 参考文献 8) pp.737 には、「住友家では移転に先立ち、専門家をして慎重に気候・風土・水質等研究せしめられた結果日本随一の事であったので遂に決行されたといはれ、如何に本村が名実共に住みよい土地であるかを如実に示された訳である。」との記述がある。

注5) 参考文献 4) pp.12 を参照。

注6) 参考文献 6) を参照。

注7) 特に山田地区の区画数について、参考文献 6) において時代が下るにつれて増加していることが示されている。

注8) 国土地理院が公開している 1985 年と 2009 年に撮影された当地域の航空写真を見比べると、例えば深田池の北側、天神川の右岸にある急傾斜地では、1985 年の写真はほとんどが森林で覆われているが、2009 年の写真では大部分が開発され十棟以上もの集合住宅が新たに建設されていることが分かる。

注9) 参考文献 7) を参照。

注10) 参考文献 3) pp.195 を参照。

注11) 12) いずれも参考文献 7) より。本論文とほぼ同じ対象地域内におけるマンションの外構での御影石の利用について、時代の推移や利用タイプとともに示されている。

注13) 参考文献 5) において、山田の旧集落域に位置する住戸は所有者の変化が少なく、概ね住吉村内に居住する住民が農村時代より継続して所有し続けていることが示されている。

注14) 参考文献 7) を参照。

【参考文献】

- 1) 水谷頌介：特集・田園都市一阪神間、『都市住宅 7411』, 1974
- 2) 坂本克比古：阪神間の住宅地形成に関する基礎的研究(2)、近代日本の大都市郊外住宅地形成過程、住宅総合研究財団研究年報, 1995
- 3) 三宅正弘：地場石材による石垣景観の形成とその特性維持に関する基礎的研究-阪神間・六甲山麓部における住宅地を事例に-、第 31 回日本都市計画学会学術研究論文集, 1996
- 4) 三宅正弘：阪神間・六甲山麓における地場石材・本御影石の石垣の形成と展開、土木史研究論文集 vol.24, 2005
- 5) 松井智美：旧集落の空間構成と在来地主に着目した住宅地形成に関する考察-神戸市住吉・山田地区を対象として-, 2017

- 6) 森井夏樹：神戸市住吉地区における住宅地形成過程と住吉学園の土地経営-土地所有者の変遷と区画の細分化に着目して-, 2016
- 7) 瀬戸口由佳：神戸市住吉・御影地区における地場石材を用いた地域らしい景観の変容と維持に関する研究、神戸大学大学院工学研究科修士論文, 2021
- 8) 武庫郡住吉村：『住吉村誌』, 1946
- 9) 武庫郡御影町：『御影町誌』, 1936
- 10) 藤岡ひろ子、池田碩：住吉川扇状地の変貌、『人文地理 27-4』, 1975
- 11) 山本ゆかり：近代郊外住宅地の萌芽の形成-住吉村を事例として-, 日本建築学会計画系論文集第 592 号, 2005
- 11) 山本ゆかり：近代郊外住宅地の住宅およびコミュニティ空間配置の特徴-住吉村を事例として-, 日本建築学会計画系論文集第 606 号, 2006